

主 題：イエスの母 — マリヤ

聖書箇所：ルカの福音書 1章 39－55節

今日は「母の日」、聖書の中にはすばらしい信仰の婦人たちがたくさん出てきますが、その中であるひとりの人物を今朝は選びました。それはイエスの母であるマリヤです。どのような人だったのか、どのようなことを私たちは彼女から学ぶことができるのか、ルカの福音書1章から見て行きましょう。マリヤがエリサベツのところを訪問した様子が39節のところから出てきます。マリヤのあいさつを聞いたエリサベツは42－45節まで、このことばをもって彼女をほめたたえるのです。それに対して、マリヤは46節から語るのですが、今、私たちは特にこの46節のところからマリヤについて見て行きます。46－47節でマリヤはこのように言いました。「**46 マリヤは言った。「わがたましいは主をあがめ、47 わが霊は、わが救い主なる神を喜びたたえます。」**」マリヤは神をほめたたえています。「**主をあがめる**」とは主の偉大さをほめたたえるということです。しかも、この「**あがめる**」ということばの時制は現在形です。彼女は継続して習慣的に神をほめたたえ続けていたこと、そのことが分かります。ですから、私たちがまず、このマリヤのことを考えるとき、彼女はまだ出産前です、聖霊によってみごもったことが分かったこのマリヤ、彼女は日々神をほめたたえながら、神を賛美しながら歩んでいた婦人だということを知ります。彼女はいったい何をほめたたえたのか、何を神に喜びとして、感謝としてたたえ続けたのか、その理由がこの後に記されています。大きく見ると二つあります。マリヤが主をあがめ続けるのですが、二つの理由があります。一つは主の偉大なみわざのゆえに、神がなさったすばらしい偉大な働き、わざのゆえに彼女は神をほめたたえるのです。もう一つは、主の偉大なご性質のゆえに主をあがめ続けるのです。そのことを今から見て行きます。

☆マリヤが神をほめたたえ続けたその理由

1. 神の偉大なみわざのゆえに

1) マリヤ自身に対する神の偉大なみわざ 47－48節

46節から見ると、マリヤはまず、自分に対する神のみわざをたたえています。神はすばらしいことを私に対してしてくださったと。47節「**わが霊は、わが救い主なる神を喜びたたえます。」**マリヤはただ「神」とは言わず「**わが救い主なる神**」と言っています。神が自分に何をしてくれたのか、マリヤのこのことばから明らかに分かります。

(1) 救いを自分に与えてくれる＝そのことを覚えてマリヤは神に賛美をささげるのです。ですから、このように見ると「**救い主なる**」ということから、彼女は自分に救いが必要であると認識しているのです。私たちはよく聞きます。彼女は「聖母」だから、救い主を生んだ方だからと、あたかも彼女が主イエス・キリストよりも優れた存在であるかのように言います。しかし、聖書はそのようなことを言っていないし、彼女もそう言っていない。彼女に罪がなかったなどと聖書は教えていません。彼女も私たちと同じ人間でした。人として生まれた以上、聖書が言うようにすべての人間は罪人として、神に逆らう者として生まれているのです。だから、皆救いが必要なのです。マリヤも同様でした。罪から解放されて神と和解することが必要だったのです。ですから、そのような必要をもった存在であるということ、彼女自身は自分がどういう存在であるかをよく知っていたのです。私たちも自分のことをよく知っている人というのは自分に罪があることを認めます。自分のその罪がきよめられる必要があることを理解しています。マリヤは自分が罪赦されて神と和解することが必要であることを理解しているのです。

(2) 自分から生まれて来る子がメシヤであることを知っていた＝同時に、マリヤは自分から生まれて来る男の子がだれであるかを知っているのです。その子が救い主であること、救世主であること、メシヤであることを知っているのです。なぜなら、ルカの福音書を見ると、御使いガブリエルが彼女のところに現われます。1：26からその話が出て来ます。そして、31－33節で「**ご覧なさい。あなたはみごもって、男の子を産みます。名をイエスとつけなさい。32 その子はすぐれた者となり、いと高き方の子と呼ばれます。また、神である主は彼にその父ダビデの王位をお与えになります。33 彼はとこしえにヤコブの家を治め、その国は終わることがありません。**」と、これが御使いがマリヤに告げたことです。御使いはあなたから生まれて来る男の子はダビデの家系であり、ダビデの王位を継承する人物だと言うのです。そのことを聞くと、みことばを見てもそうですが、「**名をイエスとつけなさい。**」と言われたこと、「**イエス**」は「主は救いである」、しかも、生まれて来る男の子は「**いと高き方の子と呼ばれます**」、他のものと比較にならない存在であり、ダビデの家系に生まれる、これらをすべて総合すると、結論として出て来るのは約束されたメシヤそのものです。イエスはダビデの家系に生まれることが約束されていました。Ⅱサムエル記

7 : 1 2 「あなたの日数が満ち、あなたがあなたの先祖たちとともに眠るとき、わたしは、あなたの身から出る世継ぎの子を、あなたのあとに起こし、彼の王国を確立させる。」と。ですから、ガブリエルがマリヤにこのようなメッセージを与えたときユダヤ人であるマリヤは何のことを話しているのかを考えたでしょう。ここに生まれて来る一人の男の子が普通でないことを、そして、自分の妊娠は神のわざであることを知っていました。生まれて来る子が特別な子であることは彼女自身が一番よく知っていたのです。

(3) エリサベツのことば「**私の主の母**」から＝しかも、エリサベツとの会話を見てください。1 : 4 3 「**私の主の母が私のところに來られるとは、何ということでしょう。**」と記されています。「**私の主**」と言ったこのことばは「王様、メシヤ」ということです。詩篇 1 1 0 : 1 に「**主は、私の主に仰せられる。…**」とあります。ダビデが記しているのですが、初めの「主」は父なる神、ヤーウェです。ヤーウェが「**私の主に仰せられる**」と、この「主」はアドナイが使われています。父なる神が別のものに話していると言うのです。続いて「**わたしがあなたの敵をあなたの足台とするまでは、わたしの右の座に着いていよ。**」と、その権威のある場所にいなさいと、そのようなことが言われています。エリサベツがどうして「**私の主**」ということばを使っているでしょう？それはエリサベツ自身がこのマリヤが宿している子がだれであるかを知っているからです。それは約束の救世主であると。4 1 節にこのように書かれています。「**エリサベツがマリヤのあいさつを聞いたとき、子が胎内でおどり、エリサベツは聖霊に満たされた。**」、ですから、彼女自身が自分の経験でこのことを理解したのではなく、聖霊なる神が働いてそのことを明らかにされたのです。不思議な神の働きでした。しかし、神が働いて神はこのエリサベツにマリヤの胎に宿っている子がだれであることを明らかにしたのです。それでエリサベツは「**私の主の母**」と言ったのです。詩篇 1 1 0 : 1 でダビデが聞いたのは父なる神とメシヤの会話です。

(4) ヨセフのことばからも＝マリヤの夫のヨセフはマリヤが身重になったことを知ったとき、マタイ 1 : 1 9 「**夫のヨセフは正しい人であって、彼女をさらし者にはしたくなかったので、内密に去らせようと決めた。**」と、そのときに天使が現われてヨセフにも教えるのです。この妊娠は神のわざであると、そして、2 1 節「**マリヤは男の子を産みます。その名をイエスとつけなさい。この方こそ、ご自分の民をその罪から救ってください方です。**」と告げるのです。ヨセフはこれらのことを一度もマリヤに話さなかったのでしょうか？みことばはそのことを記していませんが、その可能性はあったでしょう。様々な出来事があって、マリヤ自身も神から教えられたし、ヨセフも教えられました。このようなことを通してもう一度ルカ 1 章を見ると、「**わが救い主なる神を喜びたたえます**」と彼女は自分に救いが必要であるとしっかり認めただけでなく、生まれて来る男の子がその救いをもたらすメシヤであることを知ったのです。そして、彼女は神に対してほめ歌を歌います。

(5) 「主のはしため」であると言う＝4 8－4 9 節を見ると「**主はこの卑しいはしために目を留めてくださったからです。ほんとうに、これから後、どの時代の人々も、私をしあわせ者と思うでしょう。力ある方が、私に大きなことをしてくださいました。**」、マリヤが自分に対して為された神のみわざに対して神に賛美を感謝をささげるのですが、それは救いに関してだけではありません。自分をこのように選んでくださったこと、救い主の母に選んでくださったこと、このようなすばらしい特権が与えられたことを彼女は覚えてそのことを感謝しています。彼女は自分のことを「**卑しいはしため**」であると言いました。「**はしため**」とは「召使い、しもべ」です。「**卑しい**」、身分や地位が非常に低い、「**みすばらしい**」とか「**心が汚れている**」といった意味をもったことばです。彼女自身は私はいったい何者だろう？私はほんとうに罪深い汚れた者であり、そして、主のしもべにすぎない、そのような者であると言っています。特に、3 8 節を見ると彼女はガブリエルに対してこのように言っています。「**ほんとうに、私は主のはしためです。どうぞ、あなたのおことばどおりこの身になりますように。**」、マリヤは自分が神に対して何も誇ることができない、ただのしもべにすぎない、主人の言われることをそのまま受け入れてそれに従って行くそのようなしもべにすぎないことを、彼女はしっかり認めているのです。このことは非常に大切なことです。私たちはこのマリヤのこのような態度を見てどのように思うでしょう？もし、私たちがこの態度こそ自分に必要なものであると考えるなら、私たちは正しいのです。なぜなら、私たちの行ないを見ても、考えを見ても、歩みを見ても、どこを見ても神が喜んでくださるようなことがあるのでしょうか？神は私たちを見て何を喜ばれるのでしょうか？私たちの何を神の前に誇ることができるのでしょうか？今、ここに私たちが見ているこの女性は主の前に謙虚でありへりくだった人です。私には何一つ誇るものはありません、私は本当に卑しい主のしもべにすぎないと。

そして、マリヤは自分のほんとうの姿に気付いているだけではありません。彼女は神の恵みをしっかり覚えています。こんな私に神が「**目を留めてくださった**」、こんな私を神が覚えてくださったと言います。先ほども見ましたが 4 7 節にある「**わが救い主なる神を…**」の「**救い**」は罪からの救いだけではありません。マリヤがここで言っているのは、ほんとうに卑しいはしため、自分は神の前に何も誇ることのできない罪深い汚れたこのような私、永遠の滅びに到ってしかるべきそのような私、そのような私に神は

目を留めてくださって、神はそこから救ってくださった、つまり、そこからすばらしい恵みに溢れたところへと私を解放してくださった、導き入れてくださったと、そのことを彼女は覚えてそのことを神に感謝しているのです。先ほども言ったように、私たち自身はいったい神の前にどのような者なのか、神があなたをご覧になってどのように見ておられるのでしょうか？今、その神の前に何を自慢しますか？これまでの信仰生活の歩みですか？これまでの奉仕ですか？これまでの学びですか？真剣に考えるなら、私たちは何一つ神に誇ることはできません。まさに、穴があれば入りたいような、それほど罪深い愚かな者ではありませんか？でも、感謝なことに、神がそんな私たちに目を留めてくださって、手を差し伸べてくださって、救いのすばらしい祝福を与えようとしてくださったのです。マリヤは救われたことを感謝すると同時に、神に用いられるすばらしい特権をいただいたことを感謝するのです。彼女は自分自身、受ける資格のないもの、いただく価値のないものを神から一方的にいただいたことを覚えて感謝するのです。「**ほんとうに、これから後、どの時代の人々も、私をしあわせ者と思うでしょう。**」と、救い主の母となる祝福、特権です。ヘンドリクソンという神学者はこのように言います。「ここでマリヤが言わんとしたことは、どの時代の人々も神をほめたたえるであろうということ、なぜなら、神が彼女を驚くべき方法で祝されたから」と。つまり、マリヤは自分を自慢するのではない、自分を人々に見せびらかせて、私は立派でしょう、私はすばらしいでしょうと、そのような思いは微塵もなかった、彼女はこんなすばらしい恵みをくださった神がますますほめたたえられて行くことを願ったのです。これがへりくだった人の態度です。すばらしいみわざをなさった神がほめたたえられるように、これが霊的な人の証なのです。霊的な人は間違いません。だれが栄光を受けるべきなのかを心得ています。どんな奉仕の働きをしても、それは私たちの力でできたものではありません。神の助けがあつてできたことです。あなたの信仰が成長するのも神の恵みなのです。もし、あなたが神の前に罪をもってその働きを妨げることなく、神の前に成長したいと願い、神が教えてくださることを忠実に行なうと行こうとするなら、神はあなたのうちに働いてくださるのです。私たちがみことばを聞くのは神のみこころを知るためです。みこころを知り、そのみこころに私たちは神の助けをいただきながら従って行こうとするのです。そうすると、神が働いて私たちを変えて行ってくくださる、そして、変えられて行くにつれて私たちは言えるのです。「神さま、感謝します。私のような者をこうしてあわれみ、このように変えて行ってくくださることを感謝します。このような働きができたことを感謝します。こうして、神に仕えることができたことを感謝します。こんな賜物を与えてくださって感謝します。このように私を用いてくださっていることを感謝します。」と、日々の生活に目を向けるなら「神さま、こうして朝を迎えることができたことを感謝します。食事をいただけることを感謝します。おいしくいただけることを感謝します。神さまが疲れを取り去ってくださったことを感謝します。今日一日歩めることを感謝します。」と、なぜなら、生きていることも私たちの働きもすべてが神の働きであると知っている人は、自分がこんな運動をしているから、こんな薬を飲んでいるから、自分がこのように節制しているから元気なのではないと断言しません。もし、そのように言うなら見るべきところが間違っています。神があわれみをもって生かしてくださっているのです。感謝は神の方にもって行くのです。それ以外のところにもって行くなら私たちは間違っているのです。マリヤは自分をよく知っていました。だから、必然的に神の前にへりくだったのです。神がマリヤをへりくだらせたのです。罪に滅ぶべき者を神はあわれみ救ってくださり目を留めて用いてくださったのです。彼女はそのことを忘れていませんでした。

「へりくだり、謙虚さ」、それがどうして霊的な人の特徴でしょう？皆さん、お分かりでしょう？人の上に立とうとせず人に仕えて行こうとする人が、どうして霊的な人なのでしょう？イエスがそうだったからです。人となってこの世に来てくださった神がどのような態度をもってこの地上を歩んで来られたのか、どのように生きられたのかを見たとき、これこそ、私たちが模範とする最も霊的な人の歩みです。それは神でありながら仕える者となり、実に、あの十字架の死にまでも従われた、へりくだる者であり、神のみこころに忠実に従い続けて行く者です。そのことを私たちはマリヤのうちにみます。マリヤは信じられなかった、なぜ、私が身ごもるのか、そのことに対して天使が「主のわざである」と言ったとき、彼女はそれを受け入れて「**どうぞ、あなたのおことばどおりこの身になりますように。**」（1：38）と言います。私には分からないことだけれど神が言われたのだから必ずそうなる…。エリサベツはそのことをたたえています。1：45「**主によって語られたことは必ず実現すると信じきった人は、何と幸いなことでしょう。**」と、それがマリヤだったのです。マリヤは自分がどれほど罪深い愚かな者であるかをよく知った上で、自分の中では理解できないことであつたけれど、神が言われたのだから、私は神の言われたことを信じますと、そのような信仰を神は大いに祝してくださったのです。ですから、どこを見ても彼女は自分を自慢していません。彼女は間違っても神が受けるべきその栄光を横取りしないのです。神だけがほめたたえられるべき方、でも、自分が前に出てその栄光を少しでも自分の方に、自分もほめられるようになどとは決して思っていない。それが主の前にへりくだった謙虚な霊的な人の態度です。

パウロもそのように生きました。彼自身にも誇ることはいっぱいありました。自分の家系、教育、地位、財産など…。でも、それらはみなむなしいもの、彼はただ一つ自分の弱さを誇ると言います。Ⅱコリント12：9「しかし、主は、『わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現われるからである。』と言われたのです。ですから、私は、キリストの力が私をおおうために、むしろ大いに喜んで私の弱さを誇りましょう。』と。エレミヤはこのように言っています。9：23-24「主はこう仰せられる。『知恵ある者は自分の知恵を誇るな。つわものは自分の強さを誇るな。富む者は自分の富を誇るな。』24 誇る者は、ただ、これを誇れ。悟りを得て、わたしを知っていることを。わたしは主であって、地に恵みと公義と正義を行なう者であり、わたしがこれらのことを喜ぶからだ。』と。私たちは何を誇るべきなのか、自分自身の力でもないし、自分の知恵でもないし、自分の富でもない、誇るのはこの神だけであると言います。自分に救いをもたらしてくださったこの神だけを誇る者でありなさいと。それが私たちクリスチャンの誇りです。マリヤは自分に為された神の恵みを、主の偉大なみわざをしっかりと覚えていたのです。マリヤは自分に神がどのようなことをしてくださったのか、そのことを覚えていただけではありません。

2) 人々に対する神の偉大なみわざ 51-53節

少し飛んで51-53節を見ると、マリヤは今度は人々に対する神の偉大なみわざを覚えて、それゆえに神をたたえます。「主は、御腕をもって力強いわざをなし、心の思いの高ぶっている者を追い散らし、52 権力ある者を王位から引き降ろされます。低い者を高く引き上げ、53 飢えた者を良いもので満ち足らせ、富む者を何も持たせないで追い返されました。」「主は、御腕をもって力強いわざをなし」と神の力のことを話します。そして、ここで主に逆らう者に対してと主に従う者に対する神のみわざが記されています。主に逆らう者について、三つの描写がなされています。「心の思いの高ぶっている者を追い散らし、」「権力ある者を王位から引き降ろされ」「富む者を何も持たせないで追い返され」、高ぶりのある者、権力のある者、そして、富む者、このようなものに人間は信頼を置くのです。自分の力に頼り、自分の知恵に頼り、神以外のものに頼って生きる自信家、慢心家、そのような人たちを神は「忌み嫌う」と言われます。心が頑なな人、高ぶっている者たちに神はさばきを下されています。これまでの歴史を振り返ったときいつもそうです。恐らく皆さんも神の陣をなぶった人物といういろいろな人物を思い出されるでしょうが、一人はあのペリシテ人のゴリヤテです。生ける真の神をののしるのです。そのとき、当然皆怒りを感じたことでしょう。でも、だれも出て行く勇気がなかった、ダビデが立ち向かいそのゴリヤテを倒してしまいます。人間的に不可能と思われることを神は為さったのです。つまり、神に逆らう者に神は必ずさばきを下されるのです。同じエレミヤ書にこのように書かれています。17：5。「人間に信頼し、肉を自分の腕とし、心が主から離れる者はのろわれよ。」と。神が繰り返し私たちに教えてくれることは、間違っただけに信頼してはならないということです。私たちはいつもいろいろなものに信頼します。こうして毎日運動していたら私は長生きする、このような薬を飲んでいたら私は長生きする、こうして定期的に病院に通っていたら長生きする、私たちは何に信頼するのでしょうか？もちろん、私たちは自らの体の健康を維持するために気を付けなければいけないことはたくさんあります。でも、私たちが間違っただけに信頼してはならないことは、そのようなものが私に健康をくれているわけではありません。神のあわれみによって私は生かされているのです。クリスチャンである私たちはそのことを忘れてはいけません。他のものに目を向けてはならないのです。他のものが私たちの偶像になってはならないのです。明らかに歴史の中でこの神に心を閉ざして頑なになり、心を神以外の方向に向けて神をののしった者たちに対しての神の厳しいさばきが繰り返されています。今言ったペリシテ人に対しても、アッシリヤに対してもそうでした。あのヒゼキヤのとき、ヒゼキヤ王はすばらしいユダの王でした。偶像を国から廃絶し神をあがめていました。でも、アッシリヤの王がやって来たとき、確かに恐れがありました。アッシリヤの王は言いました。このアッシリヤの王からいったいだれが守ってくれるのか、あなたの神が守ると言えるのか？ヒゼキヤにごまかされてはならない、主に信頼せよというヒゼキヤのことばにたまされてはならないと。そのとき、生ける神をののしったアッシリヤ軍を主の使いが滅ぼしました。18万5千人が一瞬のうちに…。皆さん、神にとって18万人も20万人も100万人も、神が滅ぼそうとしたら一瞬にして滅びるのです。いったい、だれに信頼を置いているのかと言います。マリヤは言います。かつて歴史上このようなわざをなさった、神に逆らう者に対して神は厳しいさばきを与えられたと。しかし、神に従う者には神はすばらしい祝福を与えてくださった、「52 低い者を高く引き上げ、53 飢えた者を良いもので満ち足らせ、」と、神はこうして祝されたと言うのです。神は本当の満足を与えてくださったのです。必要を満ちし支えてくださったと。そうすると、今、新約の時代に生きている私たちは、ローマ書が教えるように、旧約聖書のみことばを見ることによって、神がどういうお方であるか、その当時の人たちよりよく分かっているはずで、みことばを見ることによって、アブラハムがどのように生き、神がどのように扱ったのか、ヤコブを神がどのように扱って来られたのか、あのモーセを、ダビデを、そのような信仰の勇者をどのように扱って来られたのか、私たちは見ることができます。彼らは私たちと同じ罪人です。しかし、もし

かすると彼らがあなたと違うところは、彼らはあなたより神を知って神により深い信頼を置いていたかもしれません。神により信頼して神に用いていただきたいと主の後をついて行った、そして、神は彼らを祝福して用いられたのです。何度も見て来たように、私たちはこの快適な生活の中で、神なしでもやって行けると傲慢になってしまい、神を忘れてしまっていることがないかどうかです。あなたからそれを奪い去ることはいとも簡単です。私たちはしっかり目を覚まして与えられているものを、神のために用いることです。与えられている時間を、賜物を用いることです。マリヤは主の偉大なみわざを覚えていました。神のすばらしいわざを覚えていたのです。神が人々に対してどのようなことを為されたのか、そのことを覚えることによって彼女は神に賛美をささげたのです。

3) イスラエルに対する神の偉大なみわざ 54-55節

三つ目に、神の偉大なみわざに関してマリヤが言っていることがあります。イスラエルに対する神の偉大なみわざゆえに彼女は神をたたえるのです。54-55節「**主はそのあわれみをいつまでも忘れないで、そのしもべイスラエルをお助けになりました。:55 私たちの先祖たち、アブラハムとその子孫に語られたとおりです。**」、神はイスラエルを助けられたのです。アブラハムに語られたその約束を神は覚えておられたのです。マリヤ自身、過去を振り返ったとき、神が言われたことはその通りになったと言います。詩篇98:3に「**主はイスラエルの家への恵みと真実を覚えておられる。**」とあります。神は約束されたことを必ず守られます。だから、神です。そして、マリヤはその過去を振り返ったときに、確かに、神はアブラハムに約束されたことをことごとく守って来られた、イスラエルを見捨ててはおられなかった、そして、これから先も神はイスラエルに対してすばらしい計画をもっておられる、神は確かに約束を守られると、神をほめたたえるのです。

マリヤが主の偉大なみわざゆえに神に感謝をささげたのですが、三つのことが記されていました。自分に対するすばらしいみわざ、人々に対するすばらしいみわざ、そして、イスラエルの対する神のすばらしいみわざを覚えて、そのようなすばらしい神のみわざゆえに私は神をたたえると言うのです。彼女が神をほめたたえ続けたその理由、もう一つあります。

2. 主の偉大なご性質のゆえに 49-50節

49-50節「**力ある方が、私に大きなことをしてくださいました。その御名は聖く、:50 そのあわれみは、主を恐れかしこむ者に、代々にわたって及びます。**」、ここに三つのことが記されています。神がどういうお方なのかマリヤは知っているのです。(1) 全能の方 = 「**力ある方が、私に大きなことをしてくださいました。**」、神は力ある方、他の如何なるものにも比較にならない全能のお方であると言います。私たちの神は全能の神です。どんなことでもできるのです。少し戻って、ガブリエルがマリヤと話をしているとき、マリヤは「**どうしてそのようなことになりえましょう**」と言います(1:34)。そのときガブリエルは最後にこう言います。1:37「**神にとって不可能なことは一つもありません。**」と。これが私たちの神なのです。なんという慰めでしょう。不可能なことが何一つない、どんなことでもできる全能のお方だと。マリヤはそのことを確信しているのです。(2) 聖いお方 = 「**その御名は聖く**」とあります。御名は名前ではなくその人を指していることは皆さんご存じでしょう。私の神は聖いお方だとマリヤは言うのです。他のなものにも比較にならない、すべての被造物の中で最も高く上げられた聖いお方、正しいお方、罪が一つもないお方、それが私の神だと。だから、神は罪を憎み、罪を認めることができないのです。このことをマリヤはよく知っていたから自分のことがよく分かったのです。神が聖い正しいお方、そのお方が私を見ると私のうちにどれほど大きな罪があるか、どれだけ私はこの聖い正しい神の基準から外れてしまっているかと。神は全くすべての点において聖いお方です。悲しいことに私たちは全くすべての点で聖くない者です。私たちの考えること、思うこと、口にすること、行動、どの点を見ても私たちは罪に汚れています。(3) あわれみ深い＝でも、感謝なことに、この聖い神は同時にあわれみ深いお方であると、それが三つ目に出て来ます。「**そのあわれみは、主を恐れかしこむ者に、代々にわたって及びます。**」とあります。神の変わらない愛、不動の愛のことです。罪の中にあって苦しんでいる人々、罪のもたらす結果によって苦しんでいる人々に対する神の愛です。なぜ、私たち人間が苦しむのでしょうか？それは皆、罪の結果です。なぜなら、神と正しい交わりにある人は喜びの中にあるからです。なぜ私たちが苦しむのか、苦しむのか、罪が原因ではないですか？神が最初にアダムとエバを造られたとき、罪がなかった彼らの間に、苦しみや悲しみ、悩みがあったのでしょうか？ありません、罪が私たちにそのようなものをもたらしたのです。なぜ、私たちは苦しむのでしょうか？それはいつまでたっても私たちは自分のやりたいことをしたいし、自分の好きな道を歩んで行きたいからです。神のみこころは正しいしそれに従って行くべきだと分かっているつもりでもやりたくないのです。その間で私たちは葛藤しているのです。神はそのようなすべてのことを見ておられ、私たちがいかに罪深く愚かな者かをご存じです。神はこのような私たちをあわれみ可哀想だと思ってくださっているのです。でも、このみことばは教えます。確かに、神はすべての者に対してそのようにあわれんでくださるけれど、その神のあわれみを受けるためには条

件があるのです。「**そのあわれみは、主を恐れかしこむ者に、…及びます。**」と、つまり、主を恐れかしこまない者にはあわれみは及ばないということです。詩篇 103 : 17 には「**しかし、主の恵みは、とこしえから、とこしえまで、主を恐れる者の上にある。…**」とあります。マリヤが言ったように「**主を恐れかしこむ者**」の上にあわれみが代々に及ぶのです。では、この主を恐れかしこむ生き方とはどのようなものでしょう？ある一人の神学者はこのように言っています。「主に対して畏敬、また、尊敬の念を抱くこと、恐れることではない。しかし、神のみこころに反することを避けること、また、神を喜ばせることに励むことによって彼をあがめて行くことである。」と。神がどのようなことを望んでおられるのか、そのことはもう皆さんはご存じです。それは神のみこころに従って行くことです。そのような歩みを私たちが為して行くことです。

ですから、マリヤが私たちに教えていることは、主を恐れかしこむ者、神に従う者に対して、神の喜ばれることを選択してそのように歩んで行く者に対して、神はあわれみを示し続けてくださるということです。ですから、神に従おうとしない、神のみこころに従うよりも自分の思い通りに行こうとする者には神のあわれみはないと言うのです。イエスを信じていない方、神はあなたをあわれんでいてくださる、でも、あなたがそのあわれみを拒んでいるゆえに、あなたに対する神のさばきはあわれみのないさばきです。あなたが受けなければいけないそのさばきを自分自身の身に招いているのです。神を責めないでください。神はあなたをあわれみ赦すと言われました。でも、あなたがそれを拒んだのです。神はあわれみに満ち溢れたお方です。あなたのすべてを知ってあなたを赦すと言われた、でも、その赦しを拒んだのであなたは永遠のさばきを受けます。クリスチャンである皆さん、あなた自身が日々の生活を振り返るときに、喜びと感謝をもって歩んでおられますか？マリヤという一人の女性を見てきたのですが、彼女の特徴と言えることは、神の前に霊的な人でした。まさに、私たちはすばらしい信仰の模範を見ているのです。彼女は神がどのようなことを自分にしてくれたのか、人々に何をしたのか、イスラエルの対しては？そのことを覚えて神をあがめました。同時に、私の神はこのようなお方だと、力がありきよい、そして、あわれみに満ち溢れたお方だ、だから、私はこのお方の後について行こう、神さま、どうぞ、私を使ってくださいと、そのような態度で彼女は主の前に立ったのです。神は彼女を選んだのです。この救い主の母として。彼女が立派だったからではありません。神がそのように彼女を選んだのです。どうして、神が彼女を選んだのかお分かりになるでしょう？このような信仰者だったからです。もちろん、こんな信仰者は他にもいるでしょう。神はご自分の知恵によって彼女を選び、この働きのために彼女を用いたのです。今、私たちが覚えなければいけないことは、それがどんな働きであっても、神はあなたを使ってくださいということです。そうして、この地上の人生を全うすることができたならどんなに幸いでしょう？だから、私たちが今考えなければいけないことは、私は神に用いていただくために、神にすべてのことをゆだねて神の後についているかどうかです。みこころに従って歩んで行こうとし続けているかどうかです。

マリヤ、彼女は主を恐れ、主の前にへりくだり、その約束を信頼し、そして、主をほめたたえながら生きた人です。どんなときでも彼女は主を覚えながら歩んだ人です。そんな先輩がいたのです。そして、神はあなたに同じように歩むことを期待しておられます。そして、そのような歩みがあなたにもできるのです。マリヤが歩んだように…。主の恵みを覚えてください。主がどのようなお方かを覚えてください。その方を感謝しながらその方に従って行くことです。そのときに、主はあなたを通して神のみわざを為してくださる、それでいいのです。